
高架下の参道

ただ書く人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高架下の参道

【Nコード】

N2405Y

【作者名】

ただ書く人

【あらすじ】

彼の自宅から最寄り駅まで続く道。

まるで参道のようなその道を歩く彼の体がやけに重い。

異星人や人工衛星も登場するナンセンスファンタジー。

「たんとんとショートショート」というサイトに掲載済みの作品です

地下鉄というのは、本来は地下を走る鉄道のことだろうが、頭上を走ることもある。

彼の勤務する精密機器メーカーの社屋までは、一時間弱の道のりで、地下鉄に乗っている時間は四十分ほどだ。

彼は毎朝、自宅から駅まで約十分間、地下鉄の高架下を駅まで向かって歩く。

その道は真っ直ぐで、緩やかな坂になっており、出勤時はその坂を上ることになる。

その坂の頂からさらに上に伸びる階段の先にある駅舎が見える。

歩いてみればそれほど遠くはないのだが、彼が自宅の玄関を出て高架下の道に向かい、左に曲って駅舎を見上げた時、それは遥か遠く、まるで別の国の建造物のようにすら感じられる。

夏ともなれば、なおさらだ。

暑苦しいスーツに身を包み、まだ出勤する人々もまばらな時間だというのに空気が揺らぐアスファルトの道を、あの頂上まで歩かなければならない。

今日も彼は、高架下の道に出ると、駅舎を見上げて自嘲するようなため息をもらし、同時になんとかやる気呼び起こした。

まるで参道のようだ。ふと彼は思った。

駅舎は神社。階段の脇の電柱は鳥居。真っ直ぐな参道を通ってお参りに行く参拝者。

祭神は何だろうか。商売の神様が交通の神様が、あるいは山の神様かもしれない。

拝んだ者は救われる。信じる者は救われる。イワシの頭もなんとかや。救われる者はいたい誰だ。

さっさと救ってほしいものだ。彼はまた自嘲するようなため息をし

て、歩き出した。

この日は特に暑く、まだ歩き始めて二分ほどだったが、彼の両脇や背中に汗が滲み出ていた。

手に持った茶色い革のかばんが重い。

いつもと同じかばん、いつもと同じ物しか入っていないはずのかばんだったが、彼にはずいぶんと重く感じた。

取っ手が指に食い込み、腕を引っ張られるような力が肩にかかる。

真っ直ぐに歩くことすら困難に感じる。

そういえば体も重い。歩いているはずなのにまったく進んでいないのじゃないか。体調がおかしいのか。家に帰るべきだろうか。彼は考えた。

どうにもならないので、周囲を気にしつつ、彼はかばんを地面に置いて、同時にその場に座り込んでしまった。

そして、重すぎるかばんの中を確かめた。

しかし、やはりかばんには、いつものと同じ物しか入っていない。

疑問に思いながらも、彼は最初からそれが目的であったかのようにハンドタオルを取り出し、額を拭った。

ふと人の気配を感じて、額を拭いながら後方を見ると、彼と同じ時間にこの道を歩いて駅に向かう姿を見かけることが多い、彼より少し年下と思われる男が歩いていた。

スーツなどは着ていないが、恐らく毎朝同じ時間に駅に向かってるので、社会人なのだろう。

道端でいつまでも座り込んでいるところを見られるのも恥ずかしいと思った彼は、立ち上がってかばんを取り歩き出そうとしたが、かばんが持ち上がらなかった。

いくらなんでもそんなに重いはずがない。

力を入れて引っ張るとなんとか持ち上がったが、それにしても重い。ちようどのその時、後方から来ていた男が、彼を追い抜いていくところだった。

しかし、その男はぴたりと足を止めると「あの、あなたも」と彼に問いかけた。

何のことを言っているのかわからず、愛想笑いをする彼に、男はさらに続けて言った。「かばん、重くないですか」

男はこういうと、彼の横でかばんを下ろし、先ほどの彼と同じように座り込んでしまった。

彼は奇妙に感じながらも、今日は重力が強いのか、いや、引力だったかな、などと支離滅裂な考えて自分を納得させると、「ええ、今日はかばんが重いですね」と男より先に歩き出した。

駅はまだ遠く、むしろ先ほど見た時よりも遠く見えた。

お参りも楽じゃない。暑い日も寒い日も、雨の日も雪の日も、かばんが重い日も、この参道を通ってお参りに行かなくてはならない。

足元を見ると確かに歩いている。しかし、駅は遠ざかっている。そうか、今日は重力が強いから駅が遠くなっているんだ。彼の見つめる足元に彼の額から流れた汗が落ちた。

座り込んでいた男が追いついてきて、彼の右側に並んだ。

男は彼を、彼は男をちらりと見やり、お互いに言葉もなく、同様に顔を下げて足元を見つめた。

こうしていないと先に進まず、こうしていないと駅が遠くなってしまふのだろつ。

しばらく歩いていると、今度は彼の左側に誰かが並んだ。

またちらりと見やると、異星人だった。

恐らく異星人なのだろつ。テレビやインターネットでよく見る異星人だ。

濃いネズミ色の肌、彼の胸に届くほどの身長に不釣り合いな大きな頭、白目がなく真っ黒な瞳、細い顎、異星人であることは間違いないだろつ。

これは裸ではないのだろつかと彼は思ったが、ネクタイをしているので、裸ではないのかもしれない。

もしかして今日重力が強いのは異星人の仕業だろうか。異星人なのだから重力を強くすることくらいできるだろう。

しかし、よく見ると、異星人も大量の汗をかいて、足元を見つめている。

それに黒い小さなトートバッグを持っているので、この異星人もお参りなのだろうか。

「今日は重力が強いですな」異星人が彼に話しかけた。

日本語が上手な異星人だと思いつつ「ええ、かばんが重くてかかないませんね」と彼は答えた。

異星人もお参りに行くのだから、あの駅には余程の神様が祭られているに違いない。

三人が並んで駅に向かって歩いていると、今度は三人を颯爽と追い抜かす者があつた。

自転車に乗った中年女性で、腹の部分に虎がプリントされた白いシヤツを着ている。

「ほらほら、大丈夫かい若者たち。駅が遠くなってるよ」中年女性が彼らに大きな声をかけた。

いかん、これは畏だ。彼は気づいたが、左側の異星人が顔を上げて中年女性に答えた。「ええ、本当ですかいな」

途端に遠くなる駅。「ハハッ、ほら、遠くなったでしょう」中年女性には笑い声をあげたまま、右に曲がり高架下のくぐって消えていった。

嵌められたことに気づいた異星人は「勘弁してくださいな、おばちゃん」と左手を挙げて抗議をしたが、その声は届かなかつただろう。「すみません」と異星人は小さな声で、彼とその向こうにいる男に誤つたが、彼と男は特に答えずに歩き続けた。

彼にも男にも、異星人を責める気はなく、とにかくお参りをしなければならぬと思っていなかった。

高架を電車が過ぎていく音が聞こえた。

その後に続く金属音。

ああ、これは馬が走っているんだな。蹄鉄がレールを叩く音だ。馬は重力の影響が少ないからうらやましい。彼は小さくなっていく金属音を聞きながら、少年時代に乗せてもらった馬の背を思い出していた。馬上の彼は軽かった。

彼は横目に高架を見上げた。今度は高架を真つ赤な人工衛星が走り抜けていった。

彼には一生縁のないであろう真つ赤な人工衛星は、打ち上げに向けてのトレーニング中なのだろう。

彼も一度は真つ赤な人工衛星に乗ってみたいと思っていた。

その時、彼の左手を誰かがぎゅっと掴んだ。

黒いフリルのついたピンクのワンピースを着ている中学生くらいの少女だった。

確か左側には異星人がいたはずだが、重力に耐え切れなかったのだろうか。少女になってしまった。

少女は彼の手を掴んだまま走りだそうとするが、彼は体が重く、かばんも重くて、走ることができない。

すると、少女は彼の前から回りこんで、彼が右手に持っていたかばんを取り上げて、そのかばんを前方の空中に放り投げた。

彼が思わずかばんを目で追ってしまった。

しまった。これも罠だ。

視界に入った駅がぐんぐんと遠くなる。

かばんが中空で消える。

右側の男がそこに飛び込む。

少女も続けて飛び込む。

彼はもう月よりも遠くなった駅を見つめて座り込む。

沈み込む。

重力が強い日のお参りはやめた方がいい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2405y/>

高架下の参道

2011年11月13日12時20分発行